

現代短歌 アンソロジー

〈ファンタジー〉 三十首

佐藤弓生 「かばん」
Yumio Saito



て、松川作品の「無翼天使」は見せ消ちに当たる。

永井・大塚作品では本歌取り（前者は三好達治、後者は大伴家持）の魔法が、松村・穂村作品では日常風景の異世界化が、未知の時空間を展開する。松平・杉崎作品は実人生のひとつまに對する感慨でありながら、「舟」「ベスト」という語が神話的あるいは童話的世界への接続をもうながす。たった三十一音の詩の中ではこのように、ほんの一語が世界を塗り替えることがある。

そのほか、読む人をどきっとさせる空想やナンセンスの歌、狂気や人格の分裂に触れる前川・水原作品、不穏な未来像を示す坂井作品、怪談めいた江戸・光森作品等、現実の秩序に不安定なゆらぎを与えるものも一種のファンタジーととらえてみた。

短歌にせよ他の文芸にせよ、現実世界にゆらぎを与えない作品が書かれたり読まれたりする必要は、本当はないのだ。



ファンタジーとは何かをここで述べるのは紙数的にも能力的にも手にあまるのだが、とりあえず現在、まっさきに連想されるのは「ハリー・ポッター」シリーズをはじめとする小説や映画だろう。ファンタジー評論家の石堂藍はそのキーワードとして、魔法・異世界・遍歴・妖精・精霊と神々・小人と人形・ほら話・メルヘン等を挙げている。同じく井辻朱美は、ファンタジーとは「『外に脱けでる』運動そのもの」「へひとつの(別)世界」になりたがる作品のこと」とであると考察している。

別の世界に「なりたがる」という運動性、変容性こそ、ファンタジーのかなめである。魔法や異世界などの固着化・規則化が目的なのではない。それらは世界に変化をもたらす複眼化・相対化させるための技法である。和歌でいえば、柿本人麻呂の「天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ」における見立て、藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」における「見せ消ち」といった技法はまさに詩の魔法であり、風景の異世界化に通じていると言えよう。今回のアンソロジーではたとえば、佐藤作品の「美童」や笹井作品の「拷問器具」は見立

青年にして妖精の父 夏の天はくもりにみちつつ蒼し

塚本邦雄『星餐圖』

雪の降る惑星ひとつめぐらせてすきとおりゆく宇宙のみぞおち

井辻朱美『コリオリの風』

あはれしづかな東洋の春ガリレオの望遠鏡にはなびらながれ

永井陽子『ふしぎな楽器』

宇宙ゆかば塵なす屍暗黒の辺にこそ死なめ文明の果て

大塚寅彦『ガウディの月』

白木蓮の卵いよいよ膨らみて大地の祭り始まらんとす

松村由利子『薄荷色の朝に』

「十二階かんむり売り場でございます」月のあかりの屋上に出る 穂村 弘『手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』

女の舟と男の舟の綱ほどけゆくのでなくわれが断ちきりてやる

松平盟子『プラチナ・ブルース』

夏の日を乾び黒ずみゆく百合は美童一人を部屋に飼ひをれり

佐藤通雅『美童』

仰向けに逝きたる蟬よ仕立てのよい秋のベストをきっちり着けて

杉崎恒夫『パン屋のパンセ』

寒の夜の宴の果ててうら若き無翼天使らささめき散りぬ

松川洋子『天彦』

わたくしはどちらも好きよミカエルの右の翼と左の翼

紀野 恵『フムフムランドの四季』

ふろりだの夏の光のまん中であんどろめだの果実を噛じる

北川草子『シチュー鍋の天使』

たべたのはなんのお肉と聞くのならこの世のなまへをおしへてあげる

小池純代『雅族』

急行を待つ行列のうしろでは「オランウータン食べられますか」

大滝和子『人類のヴァイオリン』

わたしだつたか 天より細く垂れきたる紐を最後に引つぱつたのは

石川美南『砂の降る教室』



ゆでたまごの拷問器具を湯へひたしきれいなサンドウィッチをつくる

笹井宏之「てんとろり」

妖精の柩に今年はじめの霜が降りた、という名のケーキ

雪舟えま「たんぼるぼる」

たまごかけごはんぐるぐるませている卵うまない熊とわたしで

やすたけまり「ミドリツキノワ」

たつたひとりの母狂はせし夕ぐれをきらきら光る山から飛び

前川佐美雄「大和」

蒼き月路地にのぼりて過ぎゆきのかなたのかごめかごめ照らせり

高野公彦「汽水の光」

月光は身に差し入りぬ仄かなる発光なして骨見え来ずや

稲葉京子「槐の傘」

銀河系そのまほらを墮ちつづく夏の雫とわれはなりてむ

前 登志夫「樹下集」

巻貝のしづけく歩む森に入りただひとりなる合唱をせり

水原紫苑「さくらさねさし」

無人戦車無人地球の街の野をはたはたと晒わらふごとくゆきかふ

坂井修一「群青層」

冬陽あびて世界ほろぼすひとことを配りわすれた郵便車たち

荻原裕幸「永遠青天症」(未刊)

月にむかい汝を負えば背中よりふたたびわれへ入りくるような

江戸 雪「椿夜」

墓地に来て月をおもへり人の住むころの月面散骨のこと

大松達知「スクールナイト」

剪りのこす葡萄に月がきて遊ぶまもなく一人が仲間に入る

三枝昂之「世界をのぞむ家」

半身は馬かもしれぬ疾駆してこの世を抜けしいちにんは今

春日いづみ「アダムの肌色」

どの靴を履いて歩めど冬霧の浜辺に五指はさだかにのこる

光森裕樹「鈴を産むひばり」